

ATHENA LIBRARY OF LIFE WRITING

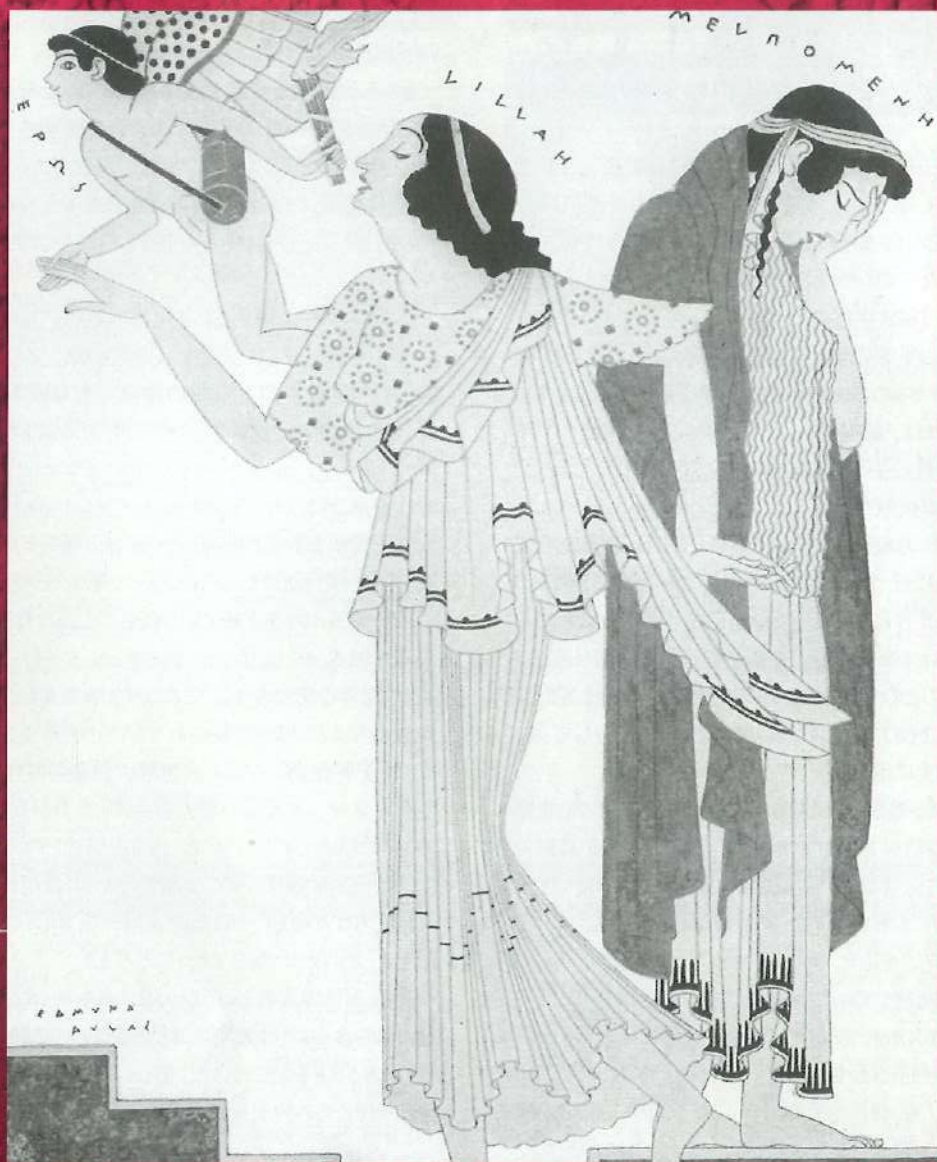
LW  
006

2012

【ライフ・ライティング】シリーズ Part 6

# イギリス舞台女優

1890-1920



「新しい女」として女優の枠を飛び越えた女性のドキュメント！

別冊解説：河内恵子(慶應義塾大学教授)

Part 6: Volumes 27-30

定価(本体 **64,000**円+税)

ISBN 978-4-86340-142-6・全4巻(分売可)+別冊解説

Athena Press

# 価値観の揺らぎを生きる：世紀転換期からモダニズム時代のイギリス舞台女優

河内 恵子 ●慶應義塾大学教授



ヴィクトリア朝時代の英国の繁栄を支えたのは経済基盤を担っていた中産階級の人びとであり、彼らの価値観が当時の英国の所謂「常識」となっていた。簡潔に言えば、勤勉さと体裁を重んじる保守性を評価する姿勢が社会の軸となっていたのだ。きわめて強固だと思われたこの軸が揺れ出したのは、1890年代のことだった。

経済的自立と男性との平等の権利を求める「新しい女」の活動がますます活発になり、彼女たちの多くは婦人参政権運動へとそのエネルギーを傾けていった。これは、結婚して、夫の仕事を支え、家庭を平和に維持することこそが女性の生きる道だと標榜していた中産階級の女性観や結婚観への大きな挑戦だった。

大都会は豊かさや進歩の象徴であると同時に、貧困と犯罪の温床でもあり、世紀が終わりに近づくと増えていた凶悪犯罪に、英国の繁栄と安全を無条件に信じていた中産階級の人びとはおののいていた。他国に先駆けて成功した産業革命は富める階級と貧しい階級の格差をそれまでのどの事象よりも明確にしたが、多発する犯罪は、その格差が絶対的なものではなく、誰でもが被害者に（そして、加害者に）なりうることを如実に示した。

この他にも伝統と常識と道徳を重んじる中産階級の人びとの心を苛む事象はあった。国民の結束力の中心であるヴィクトリア女王が高齢のため、その姿を英国国民に見せる機会が減少していたし、アイルランド問題は政治的にも宗教的にも解決への道は困難な状況を呈していた。人びとは漠然とした不安感を抱き、社会の軸と信じてきた自らの人生哲学が揺さぶられていると感じていた。彼らのこうした焦燥感の一時的カタルシスとなったのがオスカー・ワイルドの投獄だった。英国の豊穡さを華麗に（少なくとも表面的には）体現していた大都会、ロンドンのウエストエンドには、当時の人気劇作家たちの作品を上演する劇場が集まっていたが、ここで同時期に二本の作品が上演されていたのが社交界のスターでもあったオスカー・ワイルドだった。際どい言動で中産階級の人びとが重要視する道徳観に挑んでいたワイルドが、同性愛の罪で投獄されたのだ。中産階級の価値観が自由奔放な芸術至上主義者を社会から葬り去ったのだ。1895年のこの事件を「芸術が道徳に裁かれた象徴的できごと」と捉えたり「ヴィクトリア朝時代の終焉を示す悲劇」と理解する向きもあるが、結局はこれ以降も中産階級の人びとの不安感は解消されなかったことやワイルド退場の直後も英国演劇はさまざまな魅力を発信続けたことを勘案すると、世紀転換期の演劇世界を「19世紀の終焉」と把握するよりも「20世紀への架け橋」として、すなわち、ふたつの時代の継続を明らかにする時空間と解して構わないだろう。

世紀末から1920年代という30年あまりの時間で、文学史の上で

ことさら力説されるのがモダニズム運動であるが、モダニズムを「表現のテクニックの斬新さ」という観点から考えると演劇ジャンルでモダニズムが到来するのは1950年代のことである。言い換えると、この時代で演劇ジャンルにおいて破格の影響力をもった事象はモダニズム運動ではなかったということだ。誤解を怖れずに言うならば、それは女性たちだった。広く、深く、生と表現の場をきりひらいていった女性たちこそが新しい演劇世界の創造に関わっていたからだ。

もちろん第一次世界大戦はあらゆる面で多大な影響力を残した。この巨大なエネルギーが創造した芸術的磁場を見つめることは20世紀を評しようとする者の避けられないテーマである。今回は世紀転換期から20世紀半ばまで演劇界で活躍した4人の女優のライフ・ライティングに密着して、1890年から1920年代までの芸術的磁場を捉えてみたい。

ウエストエンドで提供される作品の殆どがコメディ・オヴ・マナーズやウエル・メイド・プレイと称される商業演劇であったのに対して、周辺（フリンジ）や小劇場では「女性の権利」「失業問題」「刑法改正」「階級問題」等を描出する「プロブレム・プレイ」が上演されていた。前者を「マジョリティ・ドラマ」、後者を「マイノリティ・ドラマ」と区別する傾向もあるが、時代が進むにつれて「プロブレム・プレイ」がウエストエンドで上演され、人気を博する事態も出現した。伝統と保守的な価値観と戦う「新しい女」を創り続けたのがG. B. ショーであり、その「観念の演劇」に反対しエンターテインメントを求めている観客のために作家は書くべきだと主張したのがW. S. モームだった。彼のウエル・メイド・プレイはオスカー・ワイルドの世界を彷彿させる。このような演劇作品の連鎖や反復のなかで女性たちはどのように描かれていたのだろうか？ また、先に述べたように、世紀転換期から第一次世界大戦後の時代においてもっとも大きな変化を見せ、多大な影響力を発揮したのが女性たちだったとするならば、その原点とでもいうべき、自立と男性との平等の権利を求めた「新しい女」たちは劇作品のなかでどのように表現されてきたのだろうか？ また、女優たちは女優という職業的立場から「新しい女」のありかたをどのように考え、どのように演じてきたのだろうか？

第一次世界大戦という巨大なエネルギーの渦のただ中であっても女性たちの多くはこの戦争には「女性にとって新しい時代となりうる可能性」があることを信じていた。激しい時代を生きた女性たちの声を代弁する女優たちの声が今甦る。



## Part 6 : Volumes 27-30 : イギリス舞台女優 1890-1920

全4巻(分売可)+別冊解説:河内恵子(慶應義塾大学教授)

ISBN 978-4-86340-142-6 • A5判 • c. 1500 pp. 定価 本体64,000円+税 ▶2012年11月

## Contents

Volume 27: Mrs. Patrick Campbell (Beatrice Stella Cornwallis-West) *My Life and Some Letters* (1922)

ISBN 978-4-86340-143-3 • 370 pp., 41 pl. • 18,000円+税

## Beatrice Stella Campbell (1865-1940)



ピネロの2つの「問題劇」で重要な役を演じて有名になった、この時代の傑出した女優の一人。ひとつは1893年の *The Second Mrs Tanqueray* である。新しいまっとうな暮らしを始めようとする絶望的な「過去のある女」Paula役を演じ、そのパフォーマンスに広く好評を得た。ピアズリーも1894年創刊の挿絵入り文芸季刊誌 *Yellow Book* 第1巻にPaula役の彼女を描いている。もうひとつは1895年の *The Notorious Mrs Ebbsmith* で、伝統的な結婚観を持たない「新しい女」の Agnes Ebbsmith 役を

演じた。このほか、メーテルランクの *Pelléas et Mélisande* (1898年、1904年再演、再演時に Sarah Bernhardt [本シリーズ Part 1 第3巻参照] と共演)、オスカー・ワイルド原案の *Mr and Mrs Daventry* (1900)、イブセンの *Hedda Gabler* (1907)、アーサー・シモンズ版ホフマンスタールの *Elektra*、エイツの *Deirdre* (ともに1908) などがある。最後のはまり役となったのは1914年、ショウの *Pygmalion* の花売り娘 Eliza Doolittle である。もう一つ注目すべき役にジョルジュ・サンドに対するキャンベル自身の解釈を示した、メラーの *Madame Sand* (1920) がある。キャンベルはアメリカ公演でも成功、1930年代にはハリウッドでの業績もある。フランスの Pau で死去、この地に埋葬される。

「The queen of the female psychodrama」と称され、公私にわたり伝統にとらわれない生き方をしたこと、そしてこの時代にあってはきわどい印象の役をしっかりと演じたことに高い注目を得ている。

Volume 29: Cicely Hamilton *Life Errant* (1935)

ISBN 978-4-86340-145-7 • 310 pp., 20 pl. • 15,000円+税

## Cicely Mary Hamilton (née Hammill, 1872-1952)



幼少期から少女時代まで不幸な境遇にあり、1891年に名前を Hammill から Hamilton に改めて女優になるためにロンドンに出てきた。続く10年の間さまざまな劇団で端役を演じながら各地を巡業した。演技面であまりうまくいかなかったため、脚本を書くことに。彼女の最初の作品が1906年に上演されたあと、Lena Ashwell [第30巻参照] が演出・出演した1908年の第2作 *Diana of Dobson's* で喝采を浴びる。かたやフェミニストグループや女性参政権運動組織で活動するようになり、1908年に女性作家参

政権同盟 (Woman Writers' Suffrage League) を共同で設立。この後、同年設立される女優参政権同盟の活動にも積極的に関わるようになり、そこで生涯の友 Edith Craig と Christopher St John に出会う。彼女らの親しい付き合いから三人の共作による二つの有名な女性参政権を訴える作品、*How the Vote was Won* と *Pageant of Great Women* (共に1909年) が生み出されている。また同年、彼女自身で *Marriage as a Trade* というフェミニスト論文も書いている。第一次世界大戦中の数年間をフランスにいて、はじめ最前線の野戦病院で働いたのちに Lena Ashwell の慰問団に合流している。戦後はジャーナリストとして身を立て、多くの演劇作品、小説、紀行を書いた。女性運動にも引き続き関わって、子ども、未亡人、未婚の母の権利保障や、離婚後の親権における男女平等、教員・公務員の男女同一賃金、産児制限・中絶の法改正についての運動に参加した。

Volume 28: Lillah McCarthy (Lady Keeble) *Myself and My Friends* (1933)

ISBN 978-4-86340-144-0 • 330 pp., 17 pl. • 16,000円+税

## Lillah McCarthy (Lady Keeble, 1875-1960)



1890年代半ばにロンドンでデビュー、その後参加した劇団で何年もの間、イギリス、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカを巡業する。1905年にロンドンに戻り、コート劇場での Harley Granville Barker 演出のショウ作品 *Man and Superman* に出演、Ann Whitefield 役を演じる。この他多くのショウ作品に出演、役の多くは情熱的で気が強いタイプの女性であった。これには特に彼女への配役を意識して作られた作品もあった。以後バリー、メイズフィールド、ゴールズワージー、イブセン、エウリビデス、ソフォ

クレスの各作品で主役を演じ、革新的なシェイクスピア劇の拠点として有名になったロンドンのサボイ劇場での Baker 脚本による一連のシェイクスピア劇にも出演した。またアデルフィ、サボイ、セントジェームズ、キングズウェイの各劇場で運営に携わった。一方多くの女性参政権行動にも参画、女優参政権同盟の副総裁としての顔もある。Edith Craig 演出による *Cicely Hamilton* [第29巻参照] の *Pageant of Great Women* (1909) 初演にも出演した。1906年に Barker と結婚したが1917年に離婚。Baker は彼女の自伝から自分に関わる記述内容を削除するよう後に強く求めた逸話がある。1920年に植物学者 Frederick William Keeble と再婚した後、ほどなく引退している。

エドワード朝演劇の全般的な質の向上において彼女の働きは顕著であった。この時代、ショウが描く女性を演じる俳優としてトップだったうえ、Barker の演劇改革運動のなかで重要な役割を果たした。

Volume 30: Lena Ashwell *Myself a Player* (1936)

ISBN 978-4-86340-146-4 • 288 pp., 12 pl. • 15,000円+税

## Lena Ashwell (née Pocock, Lady Simson, 1872-1957)



1891年に初舞台を果たして、1900年の Charles Wyndham 演出の Henry Arthur Jones 作 *Mrs Dane's Defence* での Mrs Dane 役で名声を得て、この時代の代表的な女優の一人となる。1906年には劇団運営にも乗り出し、サボイ劇場で短期間関わったのち、1907年からキングズウェイ劇場で自身のカンパニーを率いた。ここでは新進の脚本家によるオリジナル作品を上演した。そして女性店員の人生を描いた Cicely Hamilton の *Diana of Dobson's* (1908) [第29巻参照] を演出、主演した。同年、女優参政権同盟に参加、前面で活動した。第一次世界大戦中は前線の連合国軍のためのプロの俳優たちによる慰問劇団を組織した。この他女性の救護団を作り活動しており、こうした戦時中の活動に対して OBE = 大英帝国四等勲位が与えられている。戦後、彼女の劇団は Lena Ashwell Players という名で知れ渡るようになる。常に彼女が関わりながら、質の高い内容を低価格で、ロンドン郊外の町の施設を転々としながら上演した。1924年になるとノッティング・ヒルの小さな劇場を拠点としてその活動を続けた。その上演内容には称賛を勝ち得ていたが、ウェスト・エンドの有名劇場のような商業的な取組ではなかったので、運営的には常に苦しかった。1929年にとつて財政破綻して、彼女も引退した。

俳優だった最初の夫とは、夫の飲酒と暴力を理由に離婚、その後1908年に外科医の Henry Simson と再婚している。

## Part 1: Volumes 1-8: 19世紀末イギリス舞台女優

全8巻+別冊解説：河内恵子(慶應義塾大学教授)

ISBN 978-4-86340-050-4 ・ c. 3000 pp.

定価 本体133,000円+税 ▶2010年

[収録女優] Helena Faucit, Ellen Terry, Sarah Bernhardt, Mary Anderson, Lilly Langtry, Elenora Duse, Elizabeth Robins

## Part 2: Volumes 9-12: アメリカ児童文学作家 I

全4巻+別冊解説：三浦玲一(一橋大学教授)

ISBN 978-4-86340-085-6 ・ c. 1900 pp.

定価 本体75,000円+税 ▶2011年

## Part 3: Volumes 13-18: アメリカ児童文学作家 II

全6巻+別冊解説：三浦玲一(一橋大学教授)

ISBN 978-4-86340-090-0 ・ c. 2350 pp.

定価 本体95,000円+税 ▶2011年

## Part 4: Volumes 19-23: イギリスの芸術家 I

全5巻+別冊解説：松村昌家(大手前大学名誉教授)

ISBN 978-4-86340-097-9 ・ c. 1850 pp.

定価 本体84,000円+税 ▶2011年

## Part 5: Volumes 24-26: イギリスの芸術家 II

全3巻+別冊解説：松村昌家(大手前大学名誉教授)

ISBN 978-4-86340-123-5 ・ c. 1300 pp.

定価 本体56,000円+税 ▶2012年11月

## Part 6: Volumes 27-30: イギリス舞台女優 1890-1920

全4巻+別冊解説：河内恵子(慶應義塾大学教授)

ISBN 978-4-86340-142-6 ・ c. 1500 pp.

定価 本体64,000円+税 ▶2012年11月

[収録女優] Beatrice Stella Campbell, Lillah McCarthy, Cicely Hamilton, Lena Ashwell

### 【Part 6：イギリス舞台女優 1890-1920】について】

シリーズPart 1「19世紀末イギリス舞台女優」に続き、1890年代から1920年代に活躍した女優のLife Writingをセレクト。「新しい女」として積極的に行動した4人の女優を取り上げました。

世紀末に始まるこの演劇界の新しい潮流は、社会における女性たちの役割の変化を反映したものです。伝統的な女性の役からの解放を目指す女優たちは、劇作家との活発な交流を通じて作品に反映させてきました。1880年代のイブセンイズムに続き1890年代のイギリス演劇でも、ショー、ワイルド、ピネロ、パリーらがそれぞれ違った内容で「新しい女」を示し、新たな流行の「問題劇 (problem play)」の中に新しい女性の生き方を取り込んでいます。

このような演劇界における女性の存在感の高まりは、第一次世界大戦頃まで継続的な動向でした。演じる側、見る側に女性が目立つようになってだけでなく、演出・制作や劇作をこなす女性が現れてきます。女優であるとともに脚本家でもあったJanet Achurch、Elizabeth Robins、Cicely Hamilton。自身の劇団を率い女優として自ら演じながら舞台監督として思うままに実験的で知的な演出をしたFlorence Farr、Gertrude Kingston、Lena Ashwell、Lillah McCarthy。従来型の有名な俳優や演出家が(それらは男性である)商業的な意識にとらわれて取り上げようとしなかったことを表現して見せたのです。

そして、こうした女優たちの行動は、この時代の女性運動にも重要でした。演劇に対して真剣に臨んでいたこうした女優たちのグループはそれぞれ1908年に設立された女優参政権同盟 (Actresses' Franchise League) のもっとも活動的なメンバーでもありました。街頭でデモ行進や演説を行い、弁論術を鍛え、なによりも演劇界での女性の地位向上を目指しました。そして国内中でフェミニスト劇を発表して回った活動は、参政権を中心に女性の意識を高める上で非常に成果があったものとして注目されます。



【発行】

Athena Press

株式会社 アティーナ・プレス



〒112-0011 東京都文京区千石4-33-18

Tel: 03(3946)2117 Fax: 03(5977)8026

E-mail: eigyo@athena-press.co.jp

http://www.athena-press.co.jp

【取扱書店】